

ベトナム日本語教育の“後退期” を支えた世代の語りから 見えてきたもの

～ ベトナム人の意思によって繋がれる日本語教育 ～

言語文化教育研究学会 第7回研究集会 プレ企画 (2019.6.23)

発題：坪田珠里 (京都外国語大学)

今日のテーマについて

■なんでこのテーマ？

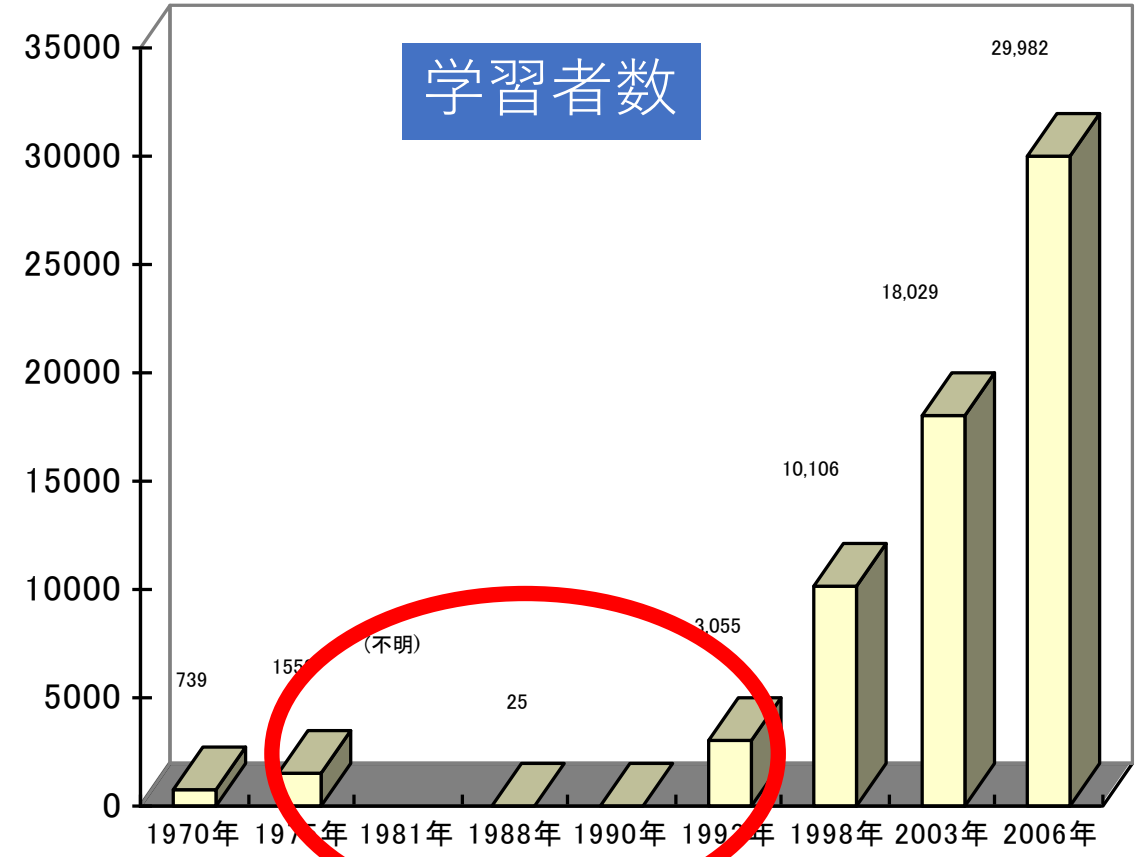
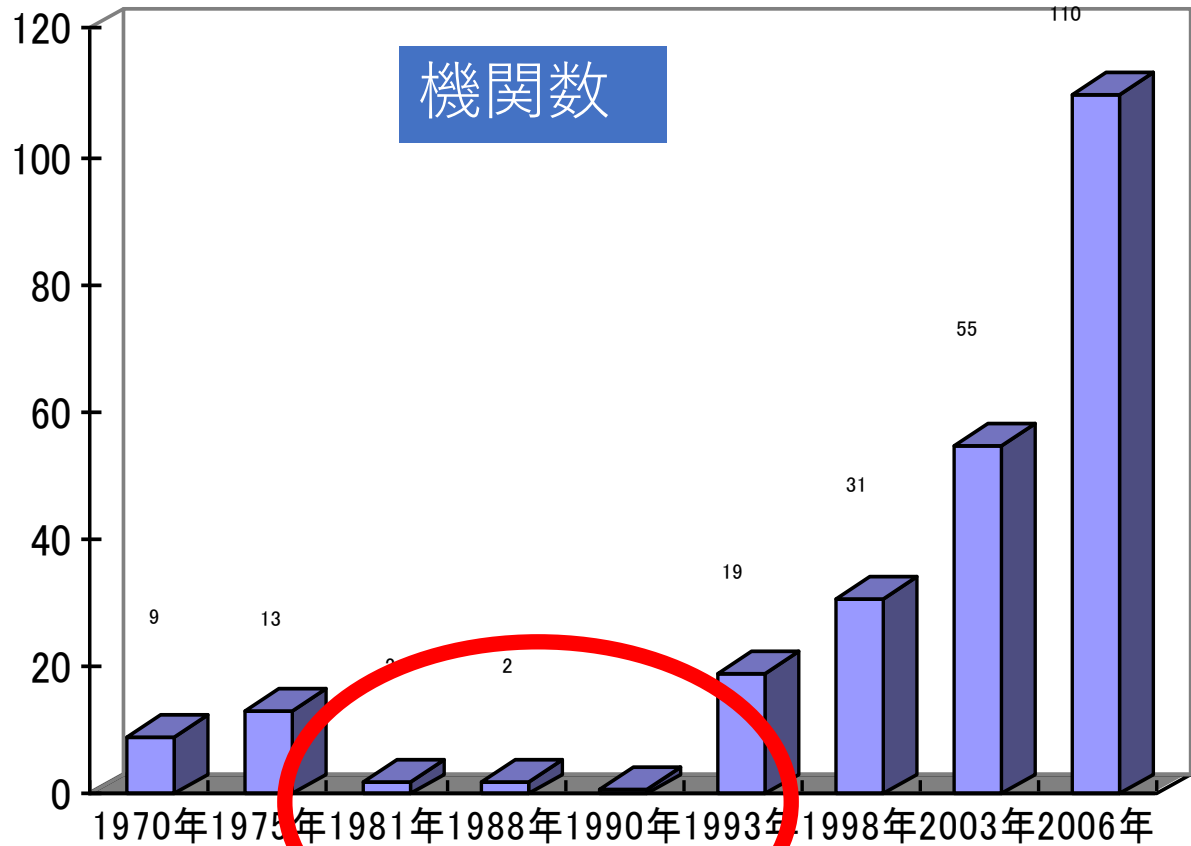
→ 私：ベトナム人日本語学習者としての個人、そして日本語話者としての個人の日本語との歩みを、歴史的背景・社会的背景の中で理解する、という研究をしています（20代から80代まで、いろんな職業の人に対してインタビュー調査しています）。

→ 今回：ベトナムの日本語教育を、**歴史的・社会的な背景において、それをつないできた人達（ベトナム人の日本語教師の方々）の語りから、理解する**試み。

→ それを踏まえて、**ハノイ** — **日本** ディスカッションにつなげます。

日本語教育の“後退期”とは？

1970年以降の日本語教育機関数と学習者数の推移



出典：国際交流基金 日本語事業部 企画調整課(2006)「世界の日本語教育とベトナムにおける日本語教育の動向『海外日本語教育機関調査』から」

2つのQ

- ベトナムの日本語教育は、**どのようなにつながってきたか**（日仏共同支配期からドイモイ（社会経済改革（1986年））の開始まで）。
- ベトナム日本語教育の**「後退期」**とはなんだったのか。

当事者（日本語学習者）の
語りから読み解く



日仏共同支配期の日本語教育



1950年代の日本語教育に関する施策
(ソ連への日本語語学留学)



1960年代の日本語教育に関する施策
(ハノイ：日文短大、北朝鮮での語学留学)



1970年代の日本語教育に関する施策
(貿易代・ハノイ外国語大学の日本語クラス開始)



1980年代の日本語教育に関する施策
(日本・ベトナム関係の悪化による日本語学科の閉鎖)

インタビュー協力者（一部）

名前	生まれ年 (年齢)	職歴	最初に日本語を 学んだ場所	教育機関での 日本語学習期間	インタビュー 実施年
A氏	1938年 (81歳)	元大学日本語学科長 民間日本語学校長	ソ連	1955年～60年	2016年 2018年
B氏	1938年 (81歳)	元大学日本語学科長	ハノイ (中国で中国語留学)	1963年～65年	2018年
C氏	1950年 (69歳)	元大学日本語学部長	北朝鮮	1967年～73年	2016年 2018年
D氏	1950年 (69歳)	日本関連研究センター長	北朝鮮	1967年～73年	2016年 2018年
E氏	1955年 (64歳)	元大学日本語学科長 民間日本語学校長	ハノイ	1972年～77年	2016年
F氏	1956年 (63歳)	元大学日本語学科長	ハノイ	1973年～78年	2016年 2018年

※インタビュー前には、個人情報保護に関する同意書について説明した後、書面に署名をもらった。
 ※個人情報保護のため、同意された場合を除き、個人を特定できる情報は伏せる。

日本ファシスト（！？）

■日本の仏領インドシナへの侵攻（1940-45）。「フランス植民主義、米帝国主義、日本ファシスト」という敵

những điều kiện tổng khởi nghĩa chưa chín muồi. Phát xít Nhật trở thành kẻ thù chính của nhân dân Đông Dương. Khẩu hiệu “Đánh đuổi Pháp – Nhật” được thay bằng khẩu hiệu “Đánh đuổi phát xít Nhật”. “ファシスト日本はインドシナ人民の正敵となった”

歴史教科書（12年生）p.112から抜粋

（E氏）「そのころ、日本人と外で会うのは自由だった。でも、必ず公安が後をつけてきていた（笑い）。家に招いて、家の中で会うのはだめだった。」

紙の資料が少なく、そして資料だけでは分からないことがたくさんある

■ ドイモイ（社会経済改革、1986年）以前の物質的な貧困
抗仏戦争（-'54年）、アメリカとの戦争（-'73年）、カンボジアとの国境紛争（'78年）、中国との国境紛争（'79年）など、戦火と国際的な孤立の中で、耐久生活を強いられた。

■ 教育現場における混乱

学校では、軍事訓練や勤労働員が日常的に行われ、空襲や戦闘を避けるために幾度となく疎開を余儀なくされた。

→ 共産党編纂の「公式記録」に議論を挟める余地がないため、研究者にとって研究のインセンティブがなかった。

→ 長引く戦火の中で、勤労働員や軍事訓練が日常的に行われていたため、その頃の学校教育については、あまり語られてこなかった。（近田2005）

当事者の語りを残しておく必要性

職業割り当て制度とは

■ 学生を含むすべての高等機関の学生を国家が一元的に管理し、卒業後には基本的に全員に対して何らかの職業を割り当てることを目的とした国家主導型の労働市場の仕組みである。（伊藤2016）

■ この国家計画による職場配置制度は、中国を含む多くの社会主義国において採用されたもの。ベトナム（民主共和国）も1957年からこの施策を取り入れた。

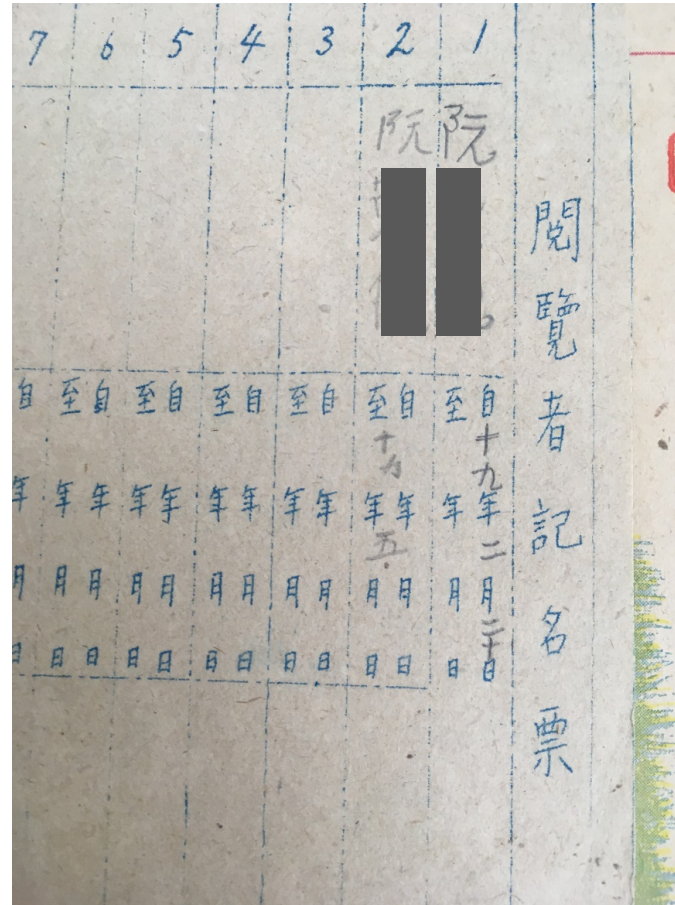
■ 日本語人材の育成（'60年代～'80年代）も、この職業割り当て制度の一環



日仏共同支配期の日本語教育

- ① 1940年～ 仏印政府が自前で行なった日本語講座（官吏などに対して）
（石黒1943）
- ② 1942年3月頃～ 華僑商務会で行われていた日本語講座（大使府が支援）
（宮原2014）
- ③ 1942年6頃～ 北部仏印日本語普及会
（本部ハノイ、支部：ハイフォンとフエ）
 - ・ 日本語学校の経営、日本語教員の指導連絡、印刷物の作成と配布
 - ・ 昼間と夜間の2講座（関野1943）

北部仏印日本語普及会で使用されていた教材の一部



社会科学院の図書館の蔵書。許可を得て2018年12月撮影



1950年代の日本語教育に関する施策 (A先生の場合)

(A氏) 「周りにも留学生に選ばれている学生がいたから、特に誇りに
思うこともなかった。ベトナムでの生活は貧しかったし、生きていくの
に精いっぱいだった。自分は外国語がよくできて成績が良かったから、
日本語を学べと言われた。自分の学年からは1人だけだった。」

(A氏) 「最初は日本語なんて勉強してもわからなかった。最初は嬉し
くなかった。自分は自然科学の方が好きだったから。でも自分は外国語
が割と得意だったから、日本語を学べ、と言われた。」

A先生のモスクワでの学び

1955年～ @モスクワ総合大学

ロシア人と一緒のクラスで日本語教育を受けた。教師はロシア人。

(A氏) 「難しかったことは、ロシア語を経由しないといけなかったこと。ソ連では、学術研究できるレベルの言語教育をやっていたから、文語もよく勉強した。もうひとつ困難だったことは、外国人だから、外で実践練習させてもらえなかったこと。」

(A氏) 「先生との関係はよかったよ。一緒に旅行したり、遊びにいったりした。ただ、奨学金もそんなになかったから、生活するのにやっとという感じ。」

A先生のソ連留学から帰国後

(A氏) 「1960年に帰ってきたけど、日本語に関する仕事は何もなかった。帰国した後は、投資課 (Phòng Thương mại) で働いた。その中で、ソ連に関する仕事をしていた。ソ連に留学した時、初めの1年半はロシア語を学んでいたし、ロシア語には常に接していたから。ソ連の団体がベトナムに来た時の通訳をしたりしていた。」



1960年代の日本語教育

ハノイでのB先生の学び

写真

日文短期大学 第1期生卒業記念
(1965年8月撮影 ご本人提供)

(B氏) 「1957年から北京の大使館で働いていたけど、62年になって、日文短期大学で日本語を学ぶよう命令が出て帰国した。」 「中国留学組は漢字を知っている点で有利だから、呼ばれたんだと思う。」

日文短期大学の日本語の先生はだれ？ → 仏印時代と1960年代以降を つなげる人物

グエン・ゴック・カイン先生
(Nguyen Ngoc Canh、1924-1982)

写真

「当時（筆者注：70年代）貿易大学の日本語教師の中心となっていたのは、フランス語の授業も担当していた50代前半の教員だった。日本の「仏印進駐」時代に日本語を学び、その後日本との貿易関係の仕事に携わり、60年代になって貿易大学で日本語教育にかかわる様になったようだ。」（宮原2004）

カイン先生のご遺影（2019年1月
許可を得て筆者撮影）

カイン先生が仏印時代に日本語を学んだのは誰から？

■ Orest Pretner (1892—1970) 大阪外大のロシア語教師
「フランスの官吏としてハノイに赴任した」 (稲田1980、宮原2014)

(Ngocさん (カイン先生の長女)) 「父は、ブオイ学校 (現 *Chu Van An* 高校) でフランス語を学んだ。日本語は、神父様から習っていた」

※ ?? 詳しい調査の余地あり

✓ 1960年代の日本語教育に関する施策 (C、D先生の場合)

写真

1967年平壤で撮影 ご本人提供

北朝鮮での学び

1967年～ 平壤外国語学院の日本語学科（同じクラスだったのは留学したベトナム人だけであり、現地の学生と交わって勉強することはなかった。教師は、現地の教師および日本人教師。）

(C氏) 「自分にとっては誇らしいことだった。我々の世代では、優秀じゃないと留学はできなかったから。ただ、1967年は、日本との国交もなかったから、学んでどうするの？という感じ。学び始めたときは、あまり好きじゃなかった。その後は慣れたけど、任務だから仕方なくやっていた。」

(D氏) 「成績が良かったから、学校に選ばれて留学生になった。自分では行きたいも行きたくないもなかった。国が行かせてくれるなら行くし。たくさん的人が行っていた。自分だけじゃない。個人の意思はなく、国家の「割り当て (phân công)」によるもの。国が、この分野を勉強しろ、といたら、それをしなくてはいけない。」

北朝鮮留学組の帰国後

→ハノイ外国語大学 日本語クラスの開始（1973年～）

（C氏）「帰国後は日本語教師に配置されたけど、日本語には自信がなかった。自分は、外国語大学では正職としては4年間教えたけど、カリキュラムがちゃんとあるわけじゃないし、自分で独自に作って行くしかなかった。」

（D氏）「1973年から1981年の間、日本語教育はまだ発展していなかったし、日本の団体がベトナムに来る機会もとても少なかった。78年から80年には、自分は通訳として水産省の調査団に同行したり、地方での建設プロジェクトに同行したりしていた。日本語を学んだのに、教える学生が少ないのはとても悲しかった。時々、商売とか他の職業に移ったほうがいいんじゃないかと考えたこともあった。」



1970年代の日本語教育

貿易大学

教師：カイン先生とB先生他

日文短大が貿易大に吸収され、
1972年になると、日本語が
正式な学科となった。



教え子としてのE先生、F先生

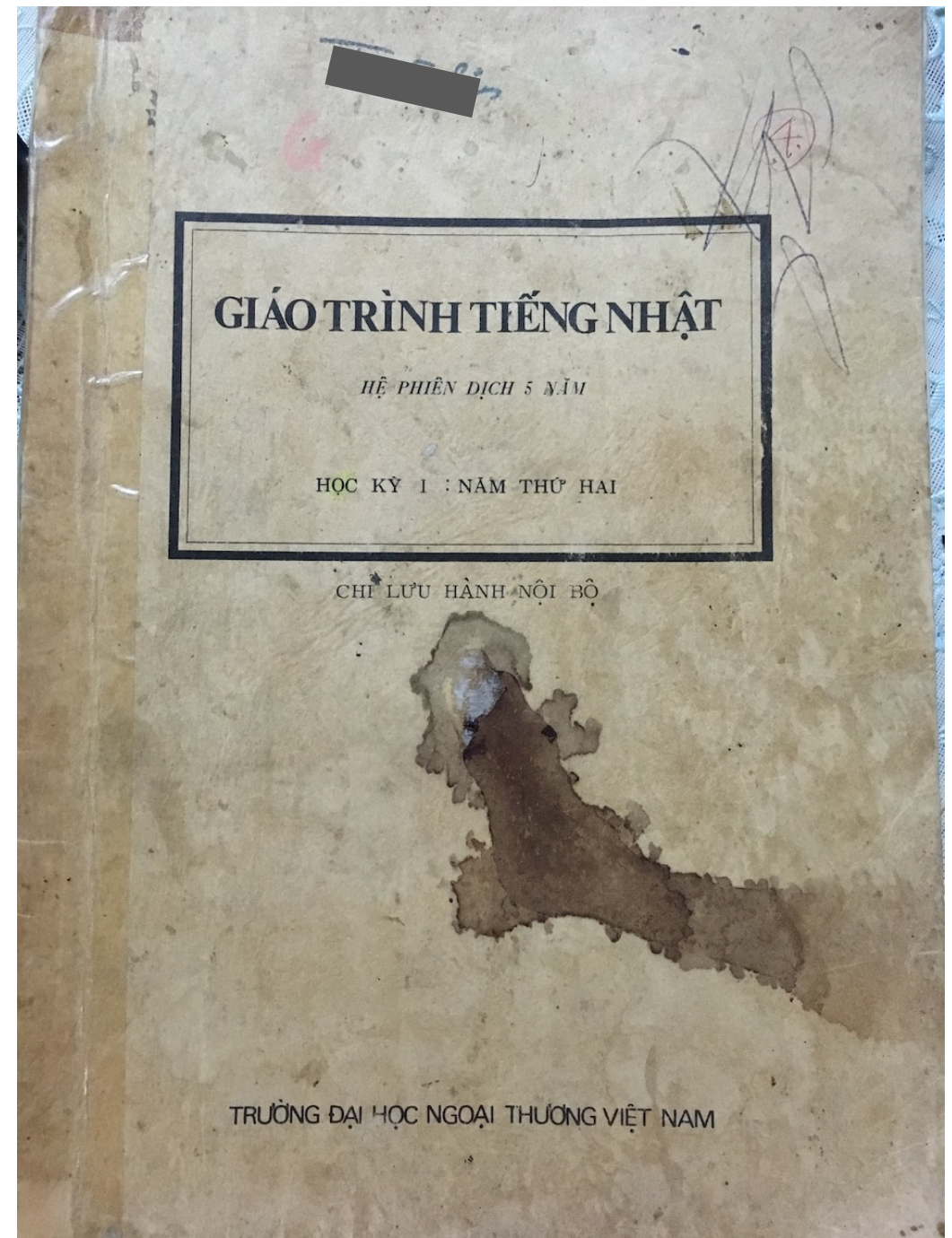
ハノイ外国語大学（現ハノイ大学）
教師：C先生、D先生他

1973年から中国語科の第二外国語と
して、1976年から、日本語・中国語
の2ヶ国語養成コースとして、学位
のとれる外国語となった。

教え子が母校の教師となって、
日本語教育をつなげていった

B先生が中心となって作成された、当時貿易大で使われていた教科書の1つ

翻訳コースのための日本語教科書
(ご本人所蔵)





1980年代の日本語教育

1977年12月、カンボジアとの国境紛争
→ 日本政府の対ベトナムODAの停止

貿易大学

1980年－1987年
日本語コースの停止

ハノイ外国語大学

1979年－1989年
日本語コースの停止

→ 日本語教育の「後退期」 (宮原2014 : 74)

日本語クラス閉鎖期間中の彼らの活動

(C氏) 「自分は、他の教師が参考にできるように、初級から上級までの教案をたくさん書いたし、ベトナムで初めての日本語学習辞典を作った。」

(D氏) (会議やシンポジウム、投資関係の通訳等、様々な経験をすることにより) 「その経験を次の若い世代に教えたかった。 研究の道、日越の協力の手伝いがしたいと思っていた。」

続き

(D氏) 「T財団の援助をうけて日本の本の翻訳もした。ベトナム人に紹介するために。でもそれも趣味かもしれない。自分は本を読むのが好きだから。」

(E氏) 「大学に提案して、政府機関の職員対象に初級日本語クラスと、補習・補強クラスを開講した。同時に日・越・英貿易用語辞典の編纂をしていた。日越－越日辞書の編纂にも参加した。」

(E氏) 「ベトナムの経済が落ち込んで大変だったとき、教師を辞めて会社に移ったりした友人もいた。当然日系企業の方が給料が高いし、昇進も早い。自分が思ったのは、そういうことをやっているのは、今後の日本語クラスの利益にならないと。だから自分は、教師の職を続けて、日本語を話せる人材を育成して、もしその後条件があるのであれば、日本と仕事をできたらもっといいなと思った。」



1990年代の日本語教育

■ 1992年 対ベトナムODAの再開

→ 日系企業の直接投資も再開

■ ドイモイ（1986年～）による経済社会的環境の変化

→ さまざまな大学で日本語学科が設立される

例) 人文社会科学大学、私立フオンドン大学（A先生）など

■ 民間日本語学校の設立（たとえばE先生が設立した学校）

Q1：ベトナムの日本語教育は、**どのようにつ**
ながれてきたか？



日本語教育 黎明期の世代（語学留学、日文短大）
(A先生、B先生)

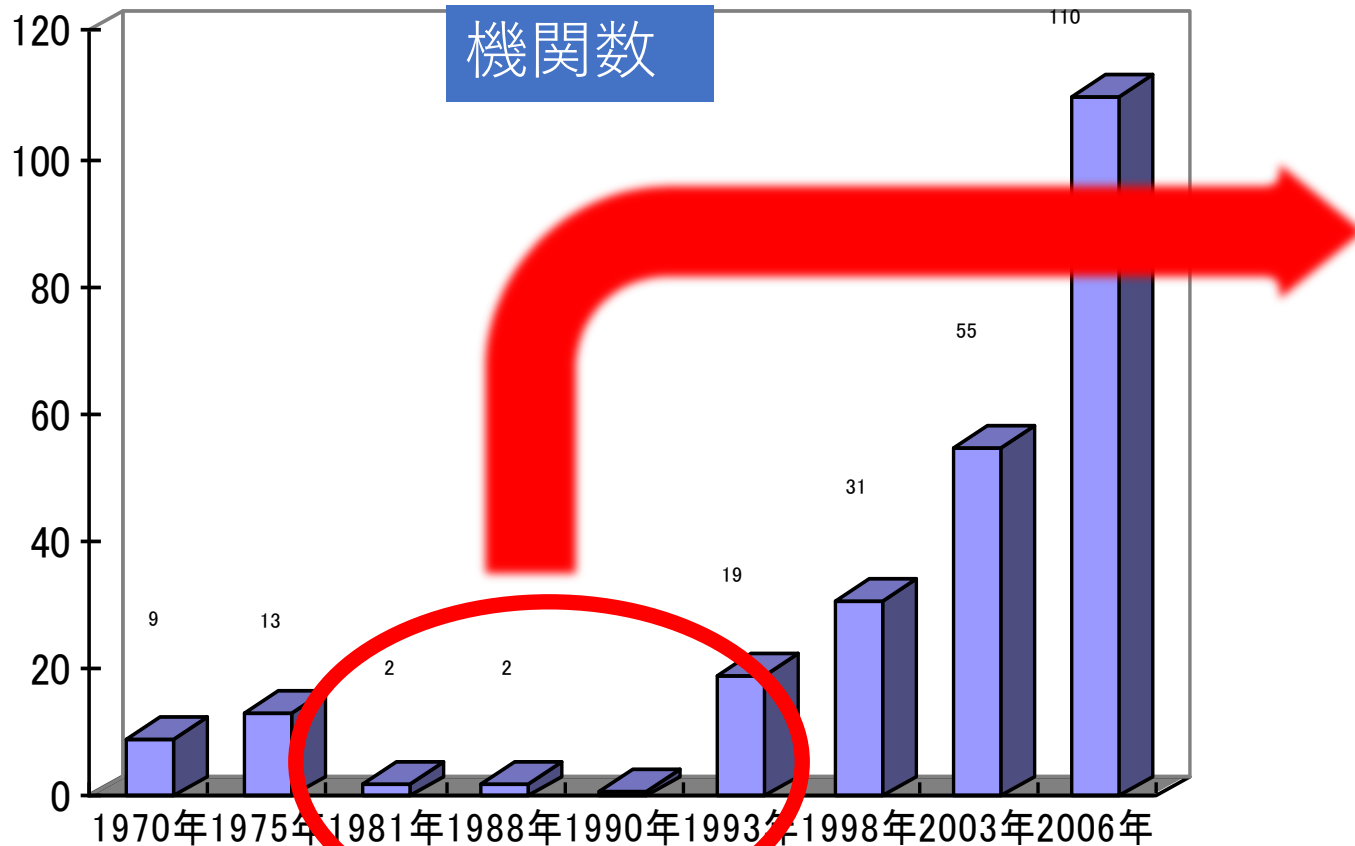
貿易大、外国語大での日本語教育の開始
(B、C、D先生)

本格的な高等教育レベルの日本語教育機関の増加、民間日本語学校の設立
(貿易大のE、F先生) (P大学の日本語学科立ち上げ時から中心となったA先生)
(ハノイで最初の民間日本語学校を作ったE先生)

↑に教えられた世代が今、日本語学部長、学科長レベルへ

Q2:ベトナム日本語教育の「後退期」とはなん だったのか？

(機関)



国家の外国語教育政策の転換によって日本語クラスの閉鎖

↓
「後の世代のために、と地道に行われていた個人的な活動」

↓
政策の転換によって日本語教育が復活するための基礎となった

という再評価

出典：国際交流基金 日本語事業部 企画調整課(2006)「世界の日本語教育とベトナムにおける日本語教育の動向『海外日本語教育機関調査』から」

今でもつながっている当時の日本語学習者

写真

写真

日文短大卒業51周年記念（2016年撮影、ご本人提供）

北朝鮮留学から帰国後51周年記念
（2018年10月撮影、ご本人提供）

語りをもとにした研究の限界

■口述史料をどう使うかということには細心の注意が必要。

オーラル・ヒストリーは「厳密な実証よりは、むしろ論文執筆の過程での著者の心象形成に役立つ、そこに絶対的な限界があり」（御厨2002：30）

- 個人の体験や回想の聞き書きであるため、回答者の記憶が間違っていること、意図的に省かれることもありうる（信頼性の問題）
- 特定の事柄について脚色されることもある（信憑生の問題）

■出来事と出来事の間空白も大きいいため、今回のインタビューから得られた史料だけではそれを決して埋め切れていない。

以上の歴史的な流れから帰納法的に推論できること

■ ベトナムの日本語教育は、国際的な政治関係や経済関係などさまざまな事情により変化（例：外国語教育政策や日本側からの支援の変化）

■ しかし、関係者の意思によってつながれてきた。

→ベトナムの日本語教育は、**たとえ日本人教師がベトナムからいなくなっても、続いていくんだらう。**

例) 日本の経済危機による日系企業の大幅撤退→日本語学習者が激減、あるいは二国間関係の断絶（極端な例ですが）

ディスカッションテーマへのつながり

ベトナムの日本語教育は、きっとこれからも形を変えながらつながれていく（ベトナム人の先生方の手によって）。

日本人先生としての役割って、
なんだろう？
（授業実践にとどまらず）

現地のベトナム人の先生方と日本人の先生方とのよりよい協力関係とはどのようなものだろう？

1970-80年代の日本からの支援例

■ 日本側もいろいろな個人・団体が多く支援をしてきた。

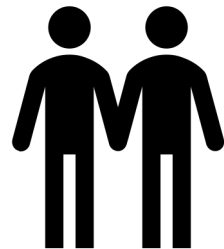
例えば、

日本ベトナム友好協会 (Tran 2013、古田2013)

個人 (例えば、杉良太郎氏の日本語センター等への支援) (Vijaca 2018)

各大学 (東京外大、大阪外大、早稲田大学など)

政府機関 (国際交流基金、JICA、在外公館)



さまざまな論点

カリキュラム
組み

日本事情・
マナー

教材選択
資料作成

講座の運営

教室外活動

シラバス作成

キャリア支援

教室内だけではなく、教室外のことも

■ ベトナム人の先生と日本人の先生の求められる役割、役割分担

・ ネイティブ/ノンネイティブ教員の連携・協働による授業実践の報告や役割分担に関する調査報告は多くある。(石井(2006)平畑(2008)など)

・ ベトナムでも、学生が日本人の先生とベトナム人の先生に求める像は異なる。(森末他2018)

■ 日本人教師として、どこまでつっこんで関わっていいのか？



繊細な
問題...

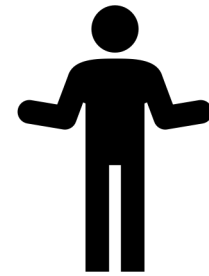
ディスカッションの（大まかな）テーマ

■ ベトナムの日本語教育機関における日本人教師の役割とは何か？（教室内、教室外）現地の先生方との協力関係の築き方は？組織のかぜ通しをよくするにはどうしたらいいのか？

・ 大学 ・ 中等教育 ・ 日本語学校 ・ 送出機関の日本語クラス etc

「自分はこんなこと考えながらやっている」

「こんなふうだったらいいのに・・・」



経験をシェアしていただくことで、ベトナムの日本語教育に対する
理解を深めたい

■ 他国での実践例も（海外の日本語教育一般として）

参考文献

- Bo Giao duc va dao tao(2013) Sach giao khoa Lich su (lop 12), Nhat xuat ban Giao duc Viet Nam
- Hoi giao luu van hoa Viet-Nhat(VIJACA)(2017) 25 nam Mot chang duong, Hoi giao luu van hoa Viet-Nhat
- Nguyen Thi Lan Anh (2018) “日越協力の現状ー日本語教育を行うハノイの大学を中心にー”Nghien cuu giang day – Ngon ngu Nhat va Nhat Ban hoc trong xu the hoi nhap phat trien, (グローバル化時代における日本語教育と日本研究) Nha xuat ban Dai hoc quoc gia Ha Noi
- Tran Son (2013) Nhung dieu hoc duoc qua bay lan gap Bac– Hoi ky cua Tran Son, Hoi cuu giao chuc, Truong dai hoc Ngoai Thuong
- Truong Dai hoc Ha Noi (2018) 45 nam, Ngay ay – Bay gio (Khoa Tieng Nhat)
- 石黒修 (1943)「日本語教育の新しい出発『外地・大陸・南方日本語教授実践』国語文化学会
- 伊藤未帆 (2016) 「現代ベトナムにおける学歴エリートのカリヤパスー制度論的アプローチに向けた予備的考察ー」 荒神衣美編『2000年代ベトナムにおける新たな社会階層の台頭』アジア経済研究所調査研究報告書
- 稲田儀一(1980)「戦中・戦前のロシア語教育」『天理大学学報』125:108-125.
- 森末浩之、Dang Thi Minh、Do Yen Linh、Bui Thu Giang (2018) 「ベトナム人学習者の教師への期待と教師国籍の関係性ー「個別性」に着目したハノイ大学大学院性の取り組み」、Nghien cuu giang day – Ngon ngu Nhat va Nhat Ban hoc trong xu the hoi nhap phat trien, (グローバル化時代における日本語教育と日本研究)、Nha xuat ban Dai hoc quoc gia Ha Noi
- 石井恵理子 (2006)「非母語話者教師の役割」『日本語教育学』15(2):87-94.
- 近田政博 (2005) 『近代ベトナム高等教育の政策史』多賀出版
- 關野房夫 (1943) 「泰國及佛印に於ける日本語教育の現状(二)」『日本語』3(9):40-49.
- 古田元夫 「日本ベトナム友好協会の58年間の活動」『日本研究論文集 越日交流史』ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学東洋学部日本研究学科ファム・ティ・トゥ・ザン編、世界出版社
- 平畑奈美 (2008) 「アジアにおける母語話者日本語教師の新たな役割ー母語話者性と日本人性の視点からー」『世界の日本語教育』18:121-139.
- 古田元夫 (2013) 「第4部 ベトナムにおける社会主義とムラードイモイ時代の北部・中部農村と集団農業経験」南塚信吾、古田元夫、加納格、奥村哲共著『21世紀歴史学の創造5 人々の社会主義』有志舎
- 宮原彬 (2004) 「日仏共同支配期のベトナムでの日本語教育：ベトナム日本語教育史のためのノート」『長崎大学留学生センター紀要』12:41-57.
- 宮原彬 (2014) 『ベトナムの日本語教育ー歴史と実践』本の泉社